

# 蔵俊著 『唯識論菩提院鈔』 中の論義 「命與身一」 について

蜷川祥美

キーワード

我見、命、身、分段生死、不思議変易生死

序

平安時代末期の興福寺に住した法相宗の学匠、菩提院蔵俊（一一〇四～一一八〇）は、『成唯識論』十卷に関する論義を集大成した『唯識論菩提院鈔』や『変旧抄』と呼ばれる鈔本を著したことで知られている。この鈔本は、後世の貞慶（一一五三～一二二三）の『唯識論尋思鈔』や良算（～一一九四～一二一七）が編纂した『成唯識論同学鈔』の基盤となったものであるが、残念ながら、その多くが散佚してしまっただものである。

これまで、彼の著した『成唯識論』十卷に関する論義抄として、活字化されているものは、『大日本仏教全書』第二十三卷所収の『唯識論同学鈔』に紛れ込んでいた『論第六卷菩提院鈔』四帖のみである。これは、法相宗の根本論典である『成唯識論』第六巻についての論義を集めたもので、四帖それぞれの奥書に、久安三年（一一四七）八月から十月にかけて、蔵俊が著した旨の記述の存するものである。<sup>\*1</sup>

『大日本仏教全書』がこの鈔本を採録するにあたり、底本としたものは興福寺蔵の写本であったようである。この写本には四帖すべての奥書に、寛正六年（一四六五）七月と八月に、長晴と興基の二名が書写した旨が記され、さらに、「四帖内第二」と「四帖内第四」には、明治二十三年（一八九〇）六月中旬に、法隆寺管主大僧正の千早定朝が、興福寺に寄進した旨が記されている。<sup>22</sup>また、対校本は、「瞬賢本」と呼ばれる写本であったようで、「四帖内第一」の末尾の奥書には、

正平七年壬辰九月廿六日 書写功訖。

願以一筆功 速証二利願 懷暁<sup>23</sup>。

と記されており、正平七年（一三五二）に懷暁が書写したものであることが知られる。

つまり、これまで『大日本仏教全書』によって活字化されていた『論第六卷菩提院鈔』四帖には、二種類の写本の存在が確認されていたのである。

ところで、奈良市西の京の法相宗大本山薬師寺において、『成唯識論同学鈔』の写本を管見する機会に恵まれ、新たな二種の『論第六卷菩提院鈔』を見いだした。

一つは、『論第六卷鈔 菩提院』と表紙に記されている六帖の写本（以下、「薬師寺A本」と呼ぶ）で、「六帖内第一」には、永禄五年（一五六二）三月の高懐の奥書があり、「六帖内第二」は、天正五年（一五七七）八月の高懐の奥書と、慶長三年（一五九八）の高懐と光弘（この時、両者は六十八歳）の奥書、「六帖内第三」は、永禄八年（一五六五）四月の高懐の奥書、「六帖内第四」は、永禄八年五月の高懐の奥書、「六帖内第五」は、永禄八年一月の高懐の奥書、「六帖内第六」は、寛永七年（一六三〇）七月の高懐の奥書が存するものである。

このうち、「六帖内第六」の寛永七年の奥書は、「六帖内第二」の慶長三年の奥書の三十二年後というこ

とであり、高懐が九十八歳の時の書写ということになり、にわかには信じがたい。年号表記の誤りであろうか。

また一つは、『論第六卷同学鈔』と表紙に記されている七帖の写本（以下、「薬師寺B本」と呼ぶ）のうち、「七帖之内二」、「七帖之内三」、「七帖之内四」、「七帖之内六」にのみ、「菩提院」の記載がみられるものである。まず、「七帖之内二」には、永享五年（一四三三）八月の継苑の奥書と、享保三年（一七一八）の照快の奥書があり、「七帖之内三」には、永禄八年四月の光弘の奥書があり、「七帖之内四」には、書写者は不明であるが、永禄八年三月の奥書があり、「七帖之内六」には、明応七年（一四九八）十月の英乗の奥書と、永禄八年三月の光弘の奥書がある。

このうち、「七帖之内二」には、最後の論義「十二分相応断通歟」の末尾に、

久安三年八月七日戌剋許抄之 蔵俊<sup>\*4</sup>

と、久安三年の蔵俊の奥書が記されているのだが、同じく「七帖之内二」の「不善業自性断歟」には、末尾に、

仁平三年二月廿九日辰時許於御社旧安居坊記畢<sup>\*5</sup>

とあり、久安三年の六年後にあたる仁平三年（一一五三）には、既に書写がなされていることが分かるのである。

この『唯識論菩提院鈔』六十二見段に、「命與身一」と題される論義がある。『成唯識論』卷六に説かれる六根本煩惱のうち、第六の悪見は①薩迦耶見、②辺執見、③邪見、④見取見、⑤戒禁取見に分類され、十根本煩惱ともいう。そのうち、薩迦耶見と辺執見について、外道の所執である六十二見とからめて論義したものである。

藏俊は、この「命與身一」において、命と身とが一つであるか否かを問うている。これは、直接は五蘊仮和合の身を誤って常一の我と認識し、さらにその我身に附属するものを我の所有であると認識する我執を扱う論義ではあるが、その背景にある法相唯識の生死觀を加味して考察すれば、彼の生命觀、仏道觀を示す論義であるともいえるのではないかといった視点からの論考である。

## 一、「命與身一」の所在

藏俊の『唯識論菩提院鈔』の論義である「命與身一」は、『論第六卷菩提院鈔』四帖内第二、『論第六卷鈔 菩提院』（薬師寺A本）六帖内第四、『論第六卷同学鈔』（薬師寺B本）七帖内第四の三種の書写本に収められている。

『論第六卷菩提院鈔』四帖を底本として、薬師寺A本、薬師寺B本との字句の同異を示すと以下の通りとなる。

問。付<sup>①</sup>十四不可記事<sup>一</sup>自性体<sup>一</sup>。且命者即身。命者異身<sup>二</sup>見。以<sup>三</sup>我見<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>体耶。答。不<sup>レ</sup>爾也。進云。疏中积<sup>三</sup>此事<sup>一</sup>。我見<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>体<sup>云々</sup>。付<sup>レ</sup>之命者即身<sup>ハ</sup>断見。命者異身<sup>ハ</sup>常見也<sup>③</sup>。断常二見。可<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>辺見<sup>一</sup>。如何以<sup>三</sup>我見<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>体耶。依<sup>レ</sup>之对法論中。出<sup>三</sup>不可記事<sup>一</sup>自性体<sup>一</sup>。二見所撰<sup>文</sup>④。覺師子积論中。二見者。辺邪<sup>二</sup>見也<sup>文</sup>⑤。若爾本疏<sup>ノ</sup>命與身<sup>一</sup>等是我見之解积。似<sup>レ</sup>背<sup>二</sup>文理<sup>一</sup>如何<sup>⑦</sup>。答。命者即身。命者異身。如<sup>レ</sup>次即蘊離蘊我見也。不可記事<sup>ハ</sup>問<sup>二</sup>此二我見<sup>一</sup>。既起<sup>三</sup>我見<sup>レ</sup>後<sup>一</sup>問<sup>二</sup>断常<sup>一</sup>。尤可<sup>二</sup>辺見<sup>一</sup>。对法<sup>ノ</sup>本积<sup>二</sup>論文<sup>一</sup>。則如<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>出難<sup>一</sup>。随疏主彼論抄中。今意欲<sup>レ</sup>問<sup>二</sup>死後断常<sup>一</sup>。我見後起<sup>カ</sup>故成<sup>二</sup>辺見<sup>一</sup>云々。但於<sup>二</sup>疏积<sup>一</sup>者。案<sup>二</sup>疏始終<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>我見<sup>一</sup>。凡於<sup>二</sup>不可記事<sup>一</sup>。辺見<sup>ヲ</sup>等<sup>二</sup>取<sup>⑧</sup>七断<sup>⑨</sup>論見<sup>⑩</sup>等<sup>之</sup>等<sup>一</sup>。見<sup>中</sup>言<sup>一</sup>。

邪見ヲハ等ニ諸ニ如是等ニ邪見ノ之等字一。而命者即身等ノ見ヲハ等ニ辺見ニ下等言一。不レ云ニ六十五ニ薩迦耶見ニ等ニ之等ニ言ニ等取トハ一。明知。本疏意ヲ。不レ許ニ我ノ見ヲ○見イ所撰義ニ歟。仍於ニ疏文ニ。可レ訓ニ命與レ身一。命者即身等ニナリヤ等ニクイフハ是ニ我見ニ於テ云ト。意ハ舉ニ不可記事ノ所問ノ我見一。不レ明ニ其自性体一也。

問。勘ニ大論說一。約ニ我見一出ニ三樣一。命者即身。命者異身。遍滿我也。不可記事中。命者即身等。可レ同レ之。何非ニ我見一。若爾疏文依ニ瑜伽論一。以ニ我見一為レ体云也。如何強ニ會レ之耶。何況イ若爾疏文若拳ニ所問見一。亦常等ハ是常見ナリヤ。等ク云モ亦可ニ所問ノ見一耶。答。命者即身等。是我見ト云事。自レ本ニ不レ相レ違レ文一。今命者即身等ノ我見後ニ起テ問ニ其斷常一。立テ為ニ不可記事一。是名ニ辺見一也。不レ云ニ命者即身等非ニ我見一。对法抄見ニ其差別一。云ニ身神一異レ我見一。今意欲レ問ニ死後斷常一。邪見後起。故成ニ辺見一。不レ問ニ死後我之有無一。但是我見ニ。\*6

【註記】

- ① 「付」：薬師寺B本は「尋」。
- ② 「身」：薬師寺A本・薬師寺B本は「身是」。
- ③ 「也」：薬師寺A本・薬師寺B本は「ナリ」。
- ④ 「文」：薬師寺A本・薬師寺B本は「ナリ」。
- ⑤ 「二」：薬師寺A本・薬師寺B本は無し。
- ⑥ 「x」：薬師寺A本・薬師寺B本は「云々」。
- ⑦ 「何」：薬師寺A本・薬師寺B本は「何耶」。
- ⑧ 「等取」：薬師寺B本は「等取ス論文」。

- ⑨ 「断」：薬師寺A本は「断論文」。
- ⑩ 「見」：薬師寺A本・薬師寺B本は無し。
- ⑪ 「辺見」：薬師寺A本・薬師寺B本は無し。
- ⑫ 「等」：薬師寺A本・薬師寺B本は「等論文」。
- ⑬ 「是」：薬師寺B本は「是我見」。
- ⑭ 「邪見」：薬師寺B本は無し。
- ⑮ 「辺見」：薬師寺A本・薬師寺B本は無し。
- ⑯ 「邊部那見」：薬師寺A本・薬師寺B本は「サカヤ見」。
- ⑰ 「意」：薬師寺A本は「积」。
- ⑱ 「○見イ」：薬師寺A本・薬師寺B本は「見」。
- ⑲ 「於云」：薬師寺A本・薬師寺B本は「ニオイト」。
- ⑳ 「様」：薬師寺B本は「類」。
- ㉑ 「瑜伽」：薬師寺A本・薬師寺B本は「ユカ」。
- ㉒ 「云」：薬師寺A本・薬師寺B本は無し。
- ㉓ 「強」：薬師寺A本・薬師寺B本は「和」。
- ㉔ 「所見イ若爾」：薬師寺A本・薬師寺B本は「何況」。
- ㉕ 「目本」：薬師寺A本・薬師寺B本は「本目」。
- ㉖ 「浄」：薬師寺A本は「浄」。
- ㉗ 「不相」：薬師寺A本・薬師寺B本は「非」。

〔28〕「見」：藥師寺B本は「積」。

〔29〕「断常」：藥師寺A本・藥師寺B本は「常断」。

尚、『唯識論同学鈔』六之四の「命與身一」には、

問。付二十四不可記事自性体一。且命者即身。命者異身ノ見。以我見為レ体可レ云耶。答。不レ然也。進云。本疏中。命與身一等。是我見云々。以我見為レ体見タリ。付レ之被レ対法論説一。尋不可記事体性一。於五見中一。二見所撰云々。覺師子積レ之。辺邪二見判セリ。若爾其自性。未レ越レ辺邪二見一。身我一異ノ見。豈我見ナラズ耶。加レ之大師自彼論疏中。積我見後起故成トレ辺見一給。

答。命者即身。命者異身。如レ次即蘊離蘊我見也。不可記事ハ起我見後辺一。問レ死後断常一。專可レ辺見一。対法本釈二論。則如レ被レ出難一。随三疏主レ彼論抄中。今意。欲レ問レ死後断常一。我見後起。故成レ辺見云々。但於レ命與身一等是我見之積者。見解釈始末一。未レ似レ進ノ意趣一。凡於レ不可記事一。辺見所撰断常見ヲハ等一取七断論見等之等言一。邪見所撰有辺等見ヲハ等一取諸如是等之等言云々。身我一異見。辺見所撰見ニ等ニ七断論等文ニ見タリ不ハレ爾可レ云三除命者身一等彼是我見一。例如レ云三除辺等四彼是邪見等一。如何判レ六十五等之等言セ唯等ストノミ界趣一。不レ云レ等ニ身我一異耶。仍疏文ヲハ可レ訓レ命與身一ナリヤ等クイハ是我見ニライテ云ト一。意ハハ举ニ不可記事所問見一。不レ明レ其自性体一也。是菩提院問答之義也 此心者。命與身一等者举ニ所問我見一為言\*7とある。

これは、藏俊の論義の引用であるが『論第十六卷菩提院鈔』四帖内第二の前半の問答と同意である。

## 二、藏俊の「命與身」説

「命與身」とは、外道の所執の六十二見のうち、『阿毘達磨大毘婆沙論』には、

命者即身。復有一類補特加羅。起如是見立如是論。命者異身。復有一類補特加羅。起如是見立如是論。

此総是我。遍滿無二無異無欠。<sup>\*8</sup>

とあり、『瑜伽師地論』には、

謂命論者計「命即身或異身等」。<sup>\*9</sup>

とあるように、命と身を一体とするという所執と、命と身は異なるものであるとの所執があることについての論義である。

藏俊は、まず、

問。付「十四不可記事」自性体。且命者即身。命者異身二見。以「我見」可為「体耶」。答。不爾也。

と、釈尊が無記として答えを示さなかった十四不可記のうち、命とは身に即するものであるのか、命とは身と異なるものであるのかといった二種の見解について、我見がその本質であるのかと問うて、そうではないとする。

ちなみに「命者即身。命者異身」については、『俱舍論』に

為「命者即身」。為「命者異身」。此問名為「但應捨置」。<sup>\*10</sup>

と説かれている。



さらに、蔵俊は、

進云。疏中釈「此事」。我見為<sub>レ</sub>体<sub>云々</sub>。付<sub>レ</sub>之命者即身、断見。命者異身、常見也。断常二見。可<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>辺見<sub>一</sub>。如何以<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体耶。

という。『成唯識論述記』に

命<sub>ハ</sub>與<sub>レ</sub>身<sub>ト</sub>一<sub>ナリトハ</sub>是<sub>レ</sub>我見<sub>ナリ</sub>。<sup>\*11</sup>

と「命者即身。命者異身」をただちに我見とするかのような記述があるが、「命者即身」とは断見のことであり、「命者異身」とは常見のことであるという。

そもそも、薩迦耶見とは我見ともいい、『成唯識論』巻第六に、

一薩迦耶見。謂於<sub>二</sub>五取蘊<sub>一</sub>執<sub>二</sub>我我所<sub>一</sub>。一切見趣<sub>レ</sub>所依<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>業。<sup>\*12</sup>

とあり、五蘊仮和合の身を誤って常一の我と認識し、さらにその我身に附属するものをも我の所有であると認識することによって、あらゆるものの見方を誤らせるものとなるのだと説かれているのである。

また、辺執見とは、辺見ともいい、同じく『成唯識論』巻第六に、

二辺執見。謂即於<sub>レ</sub>彼隨執<sub>二</sub>断常<sub>一</sub>。障<sub>二</sub>処中行出離<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>業。<sup>\*13</sup>

とあり、薩迦耶見の後に起って、我と誤って認識された五蘊仮和合の身が、断滅してしまうという見方、即ち断見と、常住であって滅することはないという見方、即ち常見が生じるのだと説かれるものである。

つまり、私の命は身が無くなれば終わりであるという見方も、命は身とともに変化せずに存続し続けるという見方も、両方が誤った見方だというのである。

諸法無我の理が説かれる仏教教理において、五蘊仮和合の身を常住の我とし、それに附属するものを自らの所有であると認識することが誤った見方であることは論をまたない。

よって、「命者即身。命者異身」とは、我見ではなく辺見といふべきではないのかと問うのである。

それについて蔵俊は、

依<sub>レ</sub>之対法論中。出<sub>二</sub>不可記事<sub>一</sub>自性体<sub>一</sub>。二見所撰<sub>文</sub>。覺師子積論中。二見者。辺邪二見也<sub>文</sub>。若爾本疏<sub>一</sub>命與身一等我見之解<sub>一</sub>。似背<sub>二</sub>文理<sub>一</sub>如何。

といい、『大乘阿毘達磨雜集論』(『対法論』)の

問於不可記事所有諸見。彼於五機見所撰。答或<sub>二</sub>或一切<sub>一</sub>。二者。謂<sub>二</sub>辺執見及邪見自相故<sub>一</sub>。一切者謂<sub>二</sub>五見眷族故<sub>一</sub>。<sup>\*14</sup>

を引用し、覺師子(師子覺)の釈として、「命者即身。命者異身」とは、辺執見と邪見であるという『対法論』の解釈と『成唯識論述記』の解釈は矛盾するのではと問うている。

その答えとしては、

答。命者即身。命者異身。如<sub>レ</sub>次即蘊離蘊<sub>一</sub>我見也。不可記事<sub>一</sub>問<sub>二</sub>此二我見<sub>一</sub>。既起<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>後<sub>二</sub>問<sub>二</sub>断常<sub>一</sub>。尤可<sub>二</sub>辺見<sub>一</sub>。

といい、「命者即身。命者異身」とは、五蘊仮和合の自分を我と誤認し、死後に存続するか否かといった視点からみた我見のことであり、すなわち辺見のことを指しているのだというのである。

次いで蔵俊は、

対法<sub>一</sub>本釈<sub>二</sub>論文<sub>一</sub>。則如<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>出難<sub>一</sub>。随疏主彼論抄中。今意欲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>死後断常<sub>一</sub>。我見後起<sub>カ</sub>故成<sub>二</sub>辺見<sub>一</sub>。<sup>ニタ</sup>

と『雜集論』や『雜集論述記』（『対法抄』）の文は出離の道を示すものだといひ、『雜集論述記』の今意欲<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>死後断常<sub>一</sub>我見後起故成<sub>二</sub>辺見<sub>一</sub> \*15 の文を引用している。

そして、藏俊は、

但於<sub>二</sub>疏釈<sub>一</sub>者。案<sub>二</sub>疏始終<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>。凡於<sub>二</sub>不可記事<sub>一</sub>。辺見<sub>ヲ</sub>ハ等<sub>一</sub>取七断論見等之等<sub>レ</sub>言<sub>一</sub>。邪見<sub>ヲ</sub>ハ等<sub>レ</sub>諸如是等<sub>ヲ</sub>見<sub>レ</sub>之等字<sub>一</sub>。而命者即身等<sub>ノ</sub>見<sub>ヲ</sub>ハ等<sub>レ</sub>辺見下等言<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>六十五<sub>一</sub>薩迦<sub>ヲ</sub>耶見<sub>レ</sub>等之等言<sub>二</sub>等取<sub>トハ</sub>一。明知。本疏意。不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>我<sub>一</sub>○見<sub>レ</sub>所撰義<sub>一</sub>歟。仍於<sub>二</sub>疏文<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>訓<sub>二</sub>命與<sub>レ</sub>身<sub>一</sub>ナリヤ等<sub>ヲ</sub>クイフハ是我見<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>云<sub>ト</sub>一。意<sub>ハ</sub>拳<sub>二</sub>不可記事<sub>ノ</sub>所問<sub>ノ</sub>我見<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>明<sub>二</sub>其自性体<sub>一</sub>也。

といい、『成唯識論述記』の始終を見るなら、「命者即身」とは辺見のなかで語られていることであり、「命與身<sub>一</sub>」とは、不可記のなかで問われる広義の我見（辺見も含意される）についての表現であり、我見そのものの性質について述べたものではないというのである。

ところで後半の論義は、以下のように説かれている。

問。勸<sub>二</sub>大論説<sub>一</sub>。約<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>出<sub>二</sub>三様<sub>一</sub>。命者即身。命者異身。遍滿我也。不可記事<sub>中</sub>。命者即身等。可<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>之。何非<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>。若爾疏文<sub>ハ</sub>依<sub>二</sub>瑜伽論<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体云也。如何強会<sub>レ</sub>之耶。何<sub>レ</sub>疏文若<sub>レ</sub>拳<sub>二</sub>所問見<sub>一</sub>。亦常等<sub>ハ</sub>是常見<sub>ナリヤ</sub>。等<sub>ク</sub>云<sub>モ</sub>亦可<sub>二</sub>所問<sub>ノ</sub>見<sub>レ</sub>耶。答。命者即身等。是我見<sub>ト</sub>云事。自<sub>レ</sub>本不<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>諍。本論説。不<sub>二</sub>相<sub>一</sub>違文<sub>一</sub>。今命者即身等<sub>ノ</sub>我見<sub>後</sub>起<sub>テ</sub>問<sub>二</sub>其断常<sub>一</sub>。立<sub>テ</sub>、為<sub>二</sub>不可記事<sub>一</sub>。是名<sub>二</sub>辺見<sub>一</sub>也。不<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>命者即身等<sub>一</sub>非<sub>二</sub>我見<sub>一</sub>。対法抄見<sub>二</sub>其差別<sub>一</sub>。云<sub>二</sub>身神<sub>一</sub>異<sub>レ</sub>庇<sub>レ</sub>我見<sub>撰</sub>。今意欲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>死

後断常<sup>一</sup>。邪見後起。故成<sup>二</sup>辺見<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>問<sup>二</sup>死後我之有無<sup>一</sup>。但是我見<sup>文</sup>。

『大論』すなわち『阿毘達磨大毘婆沙論』には、先述した通り、

命者即身。復有一類補特加羅。起如是見立如是論。命者異身。復有一類補特加羅。起如是見立如是論。此総是我。遍滿無<sup>二</sup>無異無欠<sup>一</sup>。

と説いてあり、「命者即身」は我見であるとするし、『成唯識論述記』は先述した『瑜伽師地論』に、

謂命論者計<sup>二</sup>命即身或異<sup>レ</sup>身等<sup>一</sup>。

とあることから、我見が体であるというが、それらは常見を問うための所述なのかと問うている。その答えとしては、「命者即身」とは、辺見ではあるが、不可記の説明のために広義の我見とするのだというのである。そして最後に、先述した『雜集論述記』（『対法抄』）の

身神一異<sup>レ</sup>応<sup>二</sup>我見<sup>レ</sup>撰<sup>レ</sup>今意欲<sup>レ</sup>問<sup>二</sup>死後断常<sup>一</sup>我見後起故成<sup>二</sup>辺見<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>問<sup>二</sup>死後我之有無<sup>一</sup>但是我見<sup>\*16</sup>

を引用して結びとしている。これは、身と神（命）の一異が論じられるのは、死後の我の相続を問うているわけではないとし、断見と常見すなわち辺見をも含めた広義の我見の解釈であることを示したものである。

こうした蔵俊の論義は、命と身を一体とするという所執と、命と身は異なるものであるとの所執は、我見そのものではないが、ともに我見によっておこるので、広義の我見としてもよいとの意である。しかし、成仏得道を求めているが、未だ我見にとらわれている修行者にとって、死後に命が存続するか否かといった疑問は、解決すべき重要なものである。

### 三、法相唯識における二種生死説

法相唯識では、生死という側面からも命についてとらえている。つまり、二種生死説である。

有情が生と死を連続して繰り返すことを生死の相続というが、法相唯識の根本聖典である『成唯識論』卷八の「二種生死」を説く段には、まず、

復次生死相続。由<sub>レ</sub>内因縁<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>外縁<sub>一</sub>。故唯有<sub>レ</sub>識。<sup>\*17</sup>

とある。生死の相続の因と縁はあくまでも内の識にあり、外の縁によるものではないので、ただ識のみ有りといえるのだという。

次いで、その因と縁について、

因謂有漏・無漏二業。正感<sub>レ</sub>生死<sub>一</sub>。故説為<sub>レ</sub>因。縁謂煩惱・所知二障。助感<sub>レ</sub>生死<sub>一</sub>。故説為<sub>レ</sub>縁。<sup>\*18</sup>

と述べる。正因には有漏と無漏の二業があり、助縁には煩惱と所知の二障があるというのである。

では、なぜ因と縁にそれぞれ二種説かれるのだろうか。これは、

所以者何。生死有<sub>レ</sub>二。<sup>\*19</sup>

とあるように、法相唯識では二種の生死を説くからである。

『成唯識論』には、分段生死と不思議変易生死の二種が説かれている。

まず、分段生死とは、

謂諸有漏善・不善業。由<sub>レ</sub>煩惱障縁助勢力<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>感三界麁異熟果。身命短長。随<sub>レ</sub>因・縁力<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>二定齊

限<sub>一</sub>。故名<sub>レ</sub>分段<sub>一</sub>。<sup>\*20</sup>

と説かれるように、諸の有漏の善や不善の業を因とし、煩惱障を縁として感ずる三界の麁なる異熟果のことであり、身と命に短いものや長いものがあり、因と縁の力に随って定まった斉限があるので、分段と名づけられるものである。

これについて『成唯識論述記』第八末には、「麁異熟果」について

易<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>故。有<sub>二</sub>定限<sub>一</sub>故。易<sub>二</sub>了知<sub>一</sub>故。二乘世間共知<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>故名<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>麁。五蘊為<sub>レ</sub>性。<sup>\*21</sup>  
と述べ、「身命短長（中略）故名分段」については、

此<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>也。以<sub>二</sub>此異熟身命短長或一歳一日乃至八万劫等<sub>一</sub>。随<sub>二</sub>往業因或縁之力<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>爾所時<sub>一</sub>。若身若命。定有<sub>二</sub>斉限<sub>一</sub>故。<sup>\*22</sup>

と述べている。つまり、分段生死とはわたしたち三界に生きるものが受けている五蘊の身体と命を意味し、それは一年や一日といった短いものであったり、八万劫という長いものであったりするが、限りのあるものなので分段と名づけられるものだというのである。

つまり、有漏の善・不善の業を因とし、煩惱障を助縁として感ずる三界中の麁の異熟果は、寿命の長短や身の大小など差はあるが、一定の斉限があるので分段といい、この分段の身を受けている限り輪廻を繰り返すことになる。こうした迷いのなかの生死相続を分段生死というのである。

次に、不思議変易生死とは、『成唯識論』に、

謂<sub>二</sub>諸無漏有分別業。由<sub>二</sub>所知障縁助勢力<sub>一</sub>。所<sub>レ</sub>感殊勝細異熟果。由<sub>二</sub>悲・願力改<sub>二</sub>轉身・命<sub>一</sub>無<sub>二</sub>定斉限<sub>一</sub>。故名<sub>二</sub>変易<sub>一</sub>。無漏定願正所<sub>二</sub>資感<sub>一</sub>。妙用難<sub>レ</sub>測名<sub>二</sub>不思議<sub>一</sub>。或名<sub>二</sub>意成身<sub>一</sub>。随<sub>二</sub>意願<sub>一</sub>成故。如<sub>二</sub>契經說<sub>一</sub>。如下取<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>縁有漏業因統<sub>二</sub>後有<sub>一</sub>者而生<sub>中</sub>三有<sub>上</sub>。如<sub>レ</sub>是無明習地<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>縁無漏業因。有阿羅漢・独

覺・已得自在菩薩。生三種意成身。亦名變化身。無漏定力轉令異本如變化故。如<sub>レ</sub>有論說<sub>一</sub>。声聞無學永盡<sub>レ</sub>後有<sub>一</sub>。云何能証<sub>レ</sub>無上菩提<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>變化身証<sub>レ</sub>無上覺<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>業報身<sub>一</sub>。故不<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>理。<sup>\*23</sup>

と説かれるように、諸の無漏の有分別の業を因とし、所知障を縁として感ずる殊勝な細の異熟果のことであり、悲や願の力によって身と命を斉限なく改め転ずるから変易と名づけられるものであり、無漏の願に助けられ、妙用が測りがたいものであるから不思議と名づけられるものである。また、この生死は大悲の願によって成ずるものなので、『勝鬘經』により意成身ともいう。この生死は、取の煩惱障を縁とし、有漏の業を因として、無余涅槃という未来の生死を得るものが、三界の生死を受けるように、無明すなわち所知障である無明住地を縁とし、無漏の業を因として、ある阿羅漢、独覺、已に自在を得た菩薩の得る三種の身が説かれるのである。また、この生死は、無漏の定力によって転じて、本の分段身とは異なる変化をするため、『顕揚論』によって変化身ともいう。声聞の無學は永く無余涅槃に住するが、どうして無上の菩提を証するかといえ、化身となつて無上の覺を得るといふのであり、それはただちに業報の身について述べたものではないので、道理にかなうといふのである。

これについて『成唯識論述記』では、「有阿羅漢・独覺・已得自在菩薩」について、

此即二乘無學廻心向大者。及直往菩薩八地以去。方受<sub>レ</sub>變易生死<sub>一</sub>。<sup>\*24</sup>

とし、さらに「已得自在菩薩」については、

今言<sub>レ</sub>已得自在菩薩<sub>一</sub>。是第八地。於相及土種之中<sub>一</sub>。已得<sub>レ</sub>自在<sub>一</sub>故。<sup>\*25</sup>

という。つまり、この変易生死は、後に大乘に向かう不定姓の声聞、独覺とすでに相と土において自在である八地以上の菩薩について述べられたものなのである。

ところで、『成唯識論』では、この変易生死について、

変易生死性是有漏。異熟果撰。於無漏業。是増上果。有聖教中説為無漏。出三界者。随助因説。<sup>\*26</sup>  
ともいう。変易生死は、三界の外の転生ではあるが、有漏であることには変わりはなく、異熟果の範疇にあるのだというのである。無漏の業を因としても、あくまでも間接的なものであり、他の聖教に無漏として、三界を出過すると説かれるのは、助因を述べているのに過ぎないというのである。これは、因位において、第八阿羅耶識是有漏のままであるという唯識の道理によるものであろう。

また、同じく『成唯識論』で、

無漏定・願。資有漏業。令所得果相統。長時展轉増勝。仮説名感。如是感時。由所知障為縁助力。非独能感。然所知障不障解脱。無能發業潤生用故。<sup>\*27</sup>

という。無漏の定と願が有漏の業を助けて、変易生死という果を生みだし連続させることを仮に感ずるといのだが、このように感ずる時に、所知障は縁となり、助力とはなるが、そのみで無漏の業を生み出すことはできないのである。それは、所知障に、解脱は妨げないが、業を發し、生を潤すはたらきがないからである。つまりこれは、変易身の菩薩等は、悲と願を因とし、所知障を縁として麓の異熟果である分段身を改転して、細の異熟果を得るというが、あくまでも改転であって、分段の身を離れて変易身を得ることを意味するのではないことを示しているのである。

しかし、そうではあっても、「身・命無定斉限」とあるように、変易生死が、本来斉限のある分段生死とは異なり、身と命を斉限なくするものであると説かれており、『成唯識論』には、

謂不定姓独覚・声聞・及得自在大願菩薩。已永断伏煩惱障故。無容復受当分段身。恐廢長時修菩薩行。遂以無漏勝定・願力。如延寿法資現身因。令彼長時與果不絶。数数如是定・願資助。乃至証得無上菩提。<sup>\*28</sup>



とある。これは、不定姓の独覺と声聞、及び自在を得た菩薩は、すでに煩惱障を断じ伏しているのに、新たに分段の身を受けることはない。あとは長時の菩薩の修行ができなくなることを恐れて、延寿法のように、変易身である現身の業の因つまり、過去の有漏の善業を助け、その業を長時にわたって持続させ、しばしば無漏の定と願の助けを受ければ、無上の菩提を得ることができると説かれているのである。

これらの文によって、不思議変易生死とは、無漏の有分別の業を因とし、所知障を縁として感ずる殊勝な細の異熟果のことであり、悲や願の力によって身と命を斉限なく改め転ずるから変易と名づけられるもであり、無漏の願に助けられ、妙用が測りがたいものであるから不思議と名づけられるものであり、意成身とも、変化身ともいわれるものであることがわかった。そして、不定姓の声聞、独覺と八地以上の菩薩のみが、長時の修行を完成させる過程において受ける生死であることが、その特徴であるともいえるだろう。

法相宗では、現生の命が長く続かないことは自明のことではあるが、長時の修行に堪えうる命も説かれているのである。それは、心が命を自由自在に捉えていくことによって実現するものであり、生死を超えた悟りに近づくことを志向して説かれているものなのである。

#### 四、藏俊の二種生死説の特徴

この二種生死説について『唯識論同学鈔』には、十四の論義がなされているが、そのうち、八論義において変易生死と漸悟の菩薩の階位に関する考察がある。これは、現生での肉体が減びても、命をつなぎ、

長時の修行を重ねなければならぬ菩薩道の考察を主眼におく法相唯識教学の特長を示すことであろう。蔵俊の論義にも、「漸悟悲増」「遂以無漏」「不執菩提」「下不知上」の四論義がある。

そのうち、「下不知上」とは、末注に、

菩提院御抄義也<sup>\*29</sup>

とあることから、蔵俊の論義であるとわかるものである。

これは、菩薩の受ける変易身について、下位の菩薩が上位の菩薩の変易身を知ることができるか否かに  
ついて、

疏中見<sup>二</sup>上位<sup>一</sup>二三云<sup>\*30</sup>

とあるように、『成唯識論述記』には下位が上位を見るという文<sup>\*31</sup>があるが、『成唯識論演秘』には、

下不知<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup><sup>\*32</sup>

と、下位は上位を知らないという意の文もあることから問いがなされているものである。

答えについては、『成唯識論述記』において、『成唯識論』の、

無漏定・願所<sup>二</sup>資助<sup>一</sup>者。変易身撰。非<sup>二</sup>彼境<sup>一</sup>故<sup>\*33</sup>

つまり、「無漏の定・願を助縁として変易身に撰められるものは、二乗や異生の境ではない」という文を  
解釈して、

二<sup>下</sup>設定姓声聞及不定姓未廻心者。雖<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>天眼<sup>一</sup>亦不<sup>上</sup>能<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>了。然廻心已去。設預流等。亦能見<sup>レ</sup>之。<sup>\*34</sup>

とする。つまり、定姓の声聞や不定姓の未廻心ものは、天中の淨色を体として一切の諸色を知るとい  
う天眼を得ているとはいっても、菩薩の変易身の境を知ることができないが、廻心した後には、声聞の四果  
のいずれであろうとも、その境を知ることができるとし、二積があるという。そのうち初積とは、

然不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>下得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>上<sub>一</sub>。身非<sub>二</sub>其境<sub>一</sub>故。上得見下者。初<sub>レ</sub>積也。此<sub>レ</sub>積於<sub>二</sub>四果<sub>一</sub>論<sub>二</sub>上下<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>云也。\* 35

とあるように、声聞の四果に留まっている場合は、果によって上位、下位が論じられるので、下位のもは上位の変易身を見ることができないが、廻心して菩薩となれば、同じ菩薩の類となるので、下位のものでも上位のすがたを見ることができるといのである。また、第二<sub>レ</sub>積とは、

以同類故下得見上者。第二<sub>レ</sub>積也。四果雖<sub>レ</sub>異。同菩薩類故。得<sub>二</sub>上下相見<sub>一</sub>\* 36  
とあるように、声聞には四果の違いはあるが、皆同類の漸悟の菩薩なので、上位でも下位でもお互いのすがたを見ることができるといのである。

そして、結びとして、

若爾既有<sub>二</sub>兩積<sub>一</sub>。又於<sub>二</sub>菩薩<sub>一</sub>位次<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>上下<sub>一</sub>。何為<sub>レ</sub>難耶\* 37  
としている。これは、菩薩に限れば、下位の菩薩が上位の菩薩の変易身を知ることができるのだという説である。

これは、菩薩の感得する変易身をより下位の菩薩にも広げることができるという可能性を示した解釈であるといえよう。藏俊が、分段身から脱却して変易身を得ることの可能性をいかに真摯に求めていたかを示す論義である。

藏俊の「命與身一」は、命と身を一体とするという所執と、命と身は異なるものであるとの所執は、我見そのものではないが、ともに我見によっておこるので、広義の我見としてもよいということを論じたものであった。まず、我見を破すべきことが述べられているのである。彼がこの論義を行った背景には、三祇の修行を経て成仏得道に至るといふ法相宗の学僧にとって、死後に命が存続するか否かといった論点が重要なものであったということがあげられる。そうした論点に答えるのが、法相唯識の二種生死説であることは疑いようがないことではあるが、特に変身身の理解について、その実現の可能性を広げようとした教学の展開は、彼がいかに真摯に分段身からの脱却、すなわち現生での肉体が滅びた後も、新たな命を感じ得して仏果を目指そうとしていたことを示すことであるといえよう。藏俊は、菩薩道を歩む仏教徒にとつて、仏果即ち永遠の命の実現を目指すことのできる生命の実現を目指し、仏道を歩むことが重要であると私たちに教えてくれているのである。

\* 1 『論第六卷菩提院鈔』四帖内第一の奥書には、「久安三年八月七日戌剋許抄之畢 藏俊」（仏全七三・七二四上）、四帖内第二の奥書には、「久安三年九月九日申剋抄之了 藏俊」（七五四上）、四帖内第三の奥書には、「久安三年九月廿八日申剋抄之了 藏俊」（七八三上）、四帖内第四の奥書には、「本云久安三年十月廿日辰剋抄之藏」（八〇〇下）とある。

\* 2 四帖内第一の奥書（仏全三三・一二五上）には、「寛政第六曆乙酉七月 日」とあり、四帖内第二の奥書（一三七・下）四帖

内第三の奥書（二五〇・中）、四帖内第四の奥書（二五八上）には、「寛政第六曆乙酉八月 日」とある。

\* 3 仏全三三・一二五上

\* 4 『論第六卷菩提院鈔』四帖内第一の奥書には、「久安三年八月七日戊剋許抄之畢 藏俊」（仏全三三・一二四上）とあるが、

「七帖之内」には「畢」が記されていない。

\* 5 『論第六卷菩提院鈔』四帖内第一の論義には、この記載はない。

\* 6 仏全七三六上〜七三七上

\* 7 大正六六・三六五上〜中

\* 8 大正二七・九九八下

\* 9 大正三〇・七九九中

\* 10 大正二九・一〇三下

\* 11 大正四三・四四六上

\* 12 大正三一・三二下

\* 13 同右

\* 14 大正三一・六九八中

\* 15 新纂大日本統藏経四八・五五中

\* 16 同右

\* 17 大正三一・四五上

\* 18 同右

\* 19 同右

- \* 20 同右
- \* 21 大正四三・五三五下
- \* 22 同右
- \* 23 大正三二・四五上
- \* 24 大正四三・五三六下
- \* 25 大正四三・五三六中
- \* 26 大正三二・四五中
- \* 27 同右
- \* 28 同右
- \* 29 大正六六・五〇一下
- \* 30 同右
- \* 31 「下得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>上」(大正四三・五三九上)の取意。
- \* 32 同右。これは『成唯識論演秘』(大正四三・九五〇中)に同文がある。
- \* 33 大正三二・四五中
- \* 34 大正六六・五〇一下
- \* 35 同右
- \* 36 同右
- \* 37 同右